



Title	「グローバリゼーション研究」覚え書き：『悪魔の詩』を手掛かりに
Author(s)	木村，茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2016，2015，p. 67-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57343
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「グローバリゼーション研究」 覚え書き¹

——『悪魔の詩』を手掛かりに——

木村 茂雄

1. 『悪魔の詩』とグローバリゼーション

サルマン・ラシュディの『悪魔の詩』が出版された 1988 年は、グローバリゼーションの展開においては微妙な時点といえる。それはイギリスでは、政治面でグローバリゼーションを後押ししたネオリベリズムのサッチャー政権の時代だが、ベルリンの壁が崩壊し、グローバリゼーションが新しい段階に入ったとされる 1989 年の直前にあたるからだ。本稿では、この『悪魔の詩』を参照しつつ、グローバリゼーションの現象や問題がこれまでどのように議論されてきたのかについて、現時点での覚え書きを残しておくことにしたい。

『悪魔の詩』は、シク教過激派にハイジャックされたジェット旅客機が自爆テロにより破壊され、ムンバイ出身の二人のインド人が英仏海峡めがけて落下してくるところからはじまる。そのうちの一人、インド映画の大スターのジブリールは、1955 年に公開されたインド映画の主題歌を歌いながら落下してくる。

‘O, my shoes are Japanese,’ Gibreel sang, translating the old song into English in semi-conscious deference to the uprushing host-nation, ‘These trousers English, if you please, On my head, red Russian hat; my heart’s Indian for all that.’ (Rushdie 5)

「おいらの靴は日本製、はいてるズボンはいギリス製、頭にロシアの赤帽子、それでも心はインド製」といった歌詞だが、この歌は独立後間もないインド人の愛国心を表現した歌として知られる。もう一人、イギリスのテレビ番組やコマーシャルの声優を職業としているサラディン・チャムチャは、この歌に対抗し、イギリスの愛国歌「ブリタニアよ、統治せよ」を歌いながら落ちてくる。

この歌合戦は、古典的なポストコロニアル理論に沿うなら、独立後のインドの民族精神

¹ 本稿は、日本英文学会第 87 回大会のシンポジウム「グローバル都市ロンドンの表象——文学・社会・アート」（2015 年 5 月 23 日、立正大学）で行った口頭発表「グローバリゼーションの表象と解釈」にもとづいている。

の主張に対する、イギリスへの同化や「植地的ミミクリー」のスタンスという図式に整理できるかもしれないが、「おいらの靴は日本製」の歌には、輸入品が溢れかえるインド、つまり、つねに・すでにグローバル化され、ハイブリッド化した生活環境もうかがえる。ただし「〇〇製」が、ここではまだはっきりしているようだ。一方、いまの私たちは、「メーカー」や「ブランド」と「〇〇製」が多様にずれている状況にすっかり慣れてしまっている。たとえば、私のアシックスのランニング用品も、靴はジブリーの歌と同じく日本製だが、Tシャツは中国製、トレーニング・ウェアはインドネシア製のアシックスである。

これはいうまでもなく、この数十年、貿易の自由化により関税が引き下げられてきたことや、各国間の労働賃金の格差を背景に、製造業の海外移転や海外委託が進んだこと、つまり、労働の国際分業（international division of labor）による製造業のグローバリゼーションのあらわれだが、『悪魔の詩』でも、このような海外移転に関係する深刻な事例として、アメリカの化学企業の子会社がインドのボパールという町で起こした、大規模な工場事故が言及されている。1984年に起こった事故で、拡散した有毒物質が作品では「目に見えないアメリカの雲（invisible American cloud）」と表現されている。その犠牲になった死者は、最終的に1万5千人から2万人に上るとのことだ。

ジェット旅客機というテクノロジーや、それによる移動もしばしばグローバリゼーションの象徴とされるが、「空域（air-space）」についての語り手のコメントにも、そのような意識があらわされている。

Up there in air-space, in that soft, imperceptible field which had been made possible by the century and which, thereafter, made the century possible, becoming one of its defining locations, the place of movement and war, the planet-shrinker and power-vacuum, most insecure and transitory of zones, illusory, discontinuous, metamorphic ... (Rushdie 5)

20世紀が可能にし、20世紀を可能にした「空」という場が「惑星を小さくするもの（planet-shrinker）」と表現されている。これは、社会学分野のグローバリゼーション研究の中心にある「時 - 空間の圧縮（time-space compression）」という、あとで触れる論点ともオーバーラップする観点といえる。

さらに、「テロリズム」とグローバリゼーションとの関係という問題も、とくに2001年の9.11事件以降、グローバリゼーション研究でしばしば取り上げられてきた。いま振り返るなら、9.11事件の衝撃の大きさは、ひとつには、そのグローバル性にあったのではないかとも思われる。その後、2005年7月のロンドンの爆弾テロから近年の「イスラム国」関連のテロにいたるまで、グローバリゼーションと「テロリズム」との関係はますます大きな問題になりつつある。この点を論じた代表的な研究に、アルジュン・アパデュライの2006年の *Fear of Small Numbers: An Essay on the Geography of Anger* があるが、この本によれば、「処刑」の映像公開も、9.11事件の直後から行われていたとのことだ（Appadurai 2006: 12-13）。

『悪魔の詩』に登場するシク教過激派も、アパデュライによれば、1984 年のインド国内におけるシク教徒迫害に反発して組織化されたとのことだが (Appadurai 2006: 46)、『悪魔の詩』のハイジャッカーたちのリーダー格の女性の英語には、かすかにカナダなまりがあるのを、声優のサラディンは敏感に聞き取っている。シク教徒にはカナダへの移民も多いことから、ここには「テロリズム」のグローバルな連携も暗示されているようだ。最後に飛行機を爆破させるのも彼女だが、彼女はその乗客に以下のようにつぶやく。

‘When a great idea comes into the world, a great cause, certain crucial questions are asked of it,’ she murmured, ‘History asks us: what manner of cause are we? ...’ (Rushdie 82)

「私たち」と「大義 (cause)」とを直結させた最後の疑問文は少し不自然に感じられるが、作品ではこのあと、‘What kind of idea am I?’, ‘What kind of idea is he?’, ‘WHAT KIND OF IDEA ARE YOU?’ など、人間と‘idea’を結びつけた問いかけがさまざまな人物により、さまざまなコンテキストで発せられている。しばしばイタリックスや大文字で強調されている疑問文だが、これまでにない何か重要なことが起こるとき、その根本にある思想や理念は、一体どのようなものなのかと問いかけているようだ。「新しさはどのようにして世界に入り込むのか (‘How newness comes into the world’)」という、ホミ・バーバが彼の『悪魔の詩』論のタイトルに選んだフレーズにも通じる問いといえるだろう (Bhabha 212-235)。これに倣うなら、現在のグローバリゼーションの状況についても、‘What kind of idea is globalization?’, あるいは、そこに生きている私たちについていうなら、‘What kind of idea are we in the age of globalization?’ という問いが、最終的には重要になるように思われる。

2. ポストコロニアル研究とグローバリゼーション研究

その前に、ポストコロニアル研究とグローバリゼーション研究との関係について少し述べておきたい。ひとつには、2000 年の『帝国』(Empire) が主張したように、20 世紀末から 21 世紀にかけての世界状況やそれを解釈する視点が、「ポストコロニアル」から「グローバル」へと向かってきたことは否定できないだろう (Hardt and Negri 137-146)。しかし、現代の「帝国」にも過去の帝国主義が色濃く影を落としていることは確実であり、そのことを無視してグローバリゼーションの新しさを主張するのは、スチュアート・ホールの言葉を借りるなら、「歴史的健忘症 (historical amnesia)」といわざるを得ないだろう (Hall 20)。

ただし、ポストコロニアル研究とグローバリゼーション研究との関係 (ないし無関係) については、それぞれの研究分野のちがいが大きいように思われる。大雑把にいつて、ポストコロニアル研究の中心が (旧) 植民地出身者たちによる文学研究にあったとすれば、グローバリゼーション研究は、おもに英米の学者による社会学の分野で進められてきたからだ。このふたつの研究の相互乗り入れが、まだ不十分な状態にあることも問題なのではないかと思われる。

社会学分野のグローバリゼーション研究では、1990 年のアンソニー・ギデンズの *The Consequences of Modernity* あたりから、基本的に「近代 (modernity) の拡散」という視点が強調されてきたといえる。たとえば、先に述べた、世界規模の「時 - 空間の圧縮」といった観点である。この流れをくむスティーガーの 2013 年の入門書は、「グローバリゼーション」に非常に簡潔な定義を与えている。

Globalization refers to the expansion and intensification of social relations and consciousness across world-time and world-space. (Steger 2013, 15)

「世界 - 時間および世界 - 空間を横断する社会関係と意識の拡大および強化」——ひとつの定式としては異論の余地がないが、文学や文化の研究者にとっては、あまり感動的な定義とはいえないだろう。しかし社会学の分野でも、文化のグローバル性とローカル性、普遍性と個別性、同質性と異質性など、ポストコロニアル研究とも関係の深いテーマは、ここしばらく盛んに論じられてきた。そして最近では、その両者の相互関係や相互作用が強調される傾向にあるようだ。以下はその一例である。

We should not think of globalization in terms of homogenization, then, in line with what is commonly believed and feared. Nor should we see it just in terms of diversity and differentiation, which is the opposite temptation that many more critical spirits have succumbed to. What globalization in fact brings into existence is a new basis for thinking about the relation between cultural convergence and cultural difference. (Robins 201)

グローバリゼーションを「同質化」あるいは「差異化」という対称軸で捉えるのではなく、文化の収斂 (convergence) と差異の相互関係を重視しようとする姿勢である。A か B かの二者択一を避けるこのような姿勢は基本的に重要だろう。また、グローバリゼーションはすでに確立された状態ではなく、未完のプロセスとして捉えるべきだという主張もしばしばなされている (Hirst and Thompson 288; Steger 2013: 9)。これも当たり前といえば当たり前かもしれないが、端的にいうなら、「勝負はまだ終わったわけではない」という意味で重要なポイントと思われる。

ただし、文学研究や文化研究は、ローカルないし個別的な面を重視する傾向があるため、そのような感覚からするなら、欧米系の社会科学におけるモデル作りはやや平板に感じられることもある。そこで注目されるのが、ポストコロニアル系といえる論者の視点、すなわち、すでに紹介したインドのムンバイ出身のアパデュライ、最初はアルゼンチンから不法移民として渡米したサスキア・サッセン、ジャマイカ出身のスチュアート・ホール、そしてガヤトリ・スピヴァクなどのグローバリゼーション論である。

なかでも、アパデュライが最初 1990 年に発表した論文 'Disjuncture and Difference in the

Global Cultural Economy' は、その後のグローバリゼーション研究において引用や言及の数が多分一番多いのではないかと思われる。以下は、その「さわり」である。

I propose that an elementary framework for exploring such disjunctures is to look at the relationship among five dimensions of global cultural flows that can be termed (a) *ethnoscapes*, (b) *mediascapes*, (c) *technoscapes*, (d) *finanscapes*, (e) *ideoscapes*. The suffix *-scape* allows us to point to the fluid, irregular shapes of these landscapes ... These terms with the common suffix *-scape* also indicate that these are not objectively given relations that look the same from every angle of vision, but, rather, that they are deeply perspectival constructs, inflected by the historical, linguistic, and political situatedness of different sorts of actors. (Appadurai 1996, 33)

(a) から (e) まで、「民族の光景」、「メディアの光景」、「テクノロジーの光景」、「金融資本の光景」、「思想・イデオロギーの光景」と並べられているが、この 5 つの次元の不規則な流れ (flows) や分裂 (disjunctures) から、グローバリゼーションの現象を捉えようとする試みといえる。「光景」と訳した接尾語の '*scape*' は、それぞれの次元の形状が風景のように不規則であること、またその形状が、それを見る主体の位置によってさまざまに変化することを言い表そうとした用語である。現在のグローバリゼーション状況を捉える際にも、これはまだ有効なモデルに思われる。次節では、以上の 5 つの次元が『悪魔の詩』にどのようにあらわされているか、それを『悪魔の詩』以後のグローバリゼーションの動向や、その研究にも触れながら整理してみたい。

3. 『悪魔の詩』の 5 つの光景

『悪魔の詩』における「民族の光景」の焦点は、何といても、最後は大規模な暴動にいたるロンドンの移民社会の物語になるだろう。声優のサラディンに対する入国管理局と警察の暴力からはじまり、バングラデシュ移民の一家が経営するロンドンのレストランを中心に、人種差別、住宅問題、移民のアイデンティティや自己責任、移民の第 1 世代と第 2 世代の軋轢の問題などが取り上げられていく。このような物語やテーマは、その後、ハニフ・クレイシ、モニカ・アリ、ゼイディー・スミスなどの移民小説に大きな影響を与えていくが、しかし、まさにそのために、これらのテーマはいまや定番化しているという印象もぬぐえない。この物語には、移民排斥で悪名高いイーノック・パウエル「地の川 (rivers of blood)」の演説、ネルソン・マンデラやトゥサン・ルヴェルチュールへの言及、フランツ・ファノンの引用なども散りばめられている。ジブリールがイギリスを熱帯化するなど、ラシュディならではの仕掛けも随所にみられるが、基本的には、ポストコロニアルの古典的な問題設定を軸に展開しているといって差し支えないだろう。

ジブリーがさ迷うロンドンには「迷路」や「変容」といったイメージが色濃いが、²これもディケンズのロンドンのポストコロニアル版ないしポストモダン版のように感じられる。ディケンズの *Our Mutual Friend* の映画化のために作られた大規模なセットが、「メトロポリスの短縮版」(abridged metropolis 436) として、ドラマの重要な舞台とされているのもその証拠といえるかもしれない。

次に、『悪魔の詩』における「メディアの光景」は、「金融資本の光景」とも密接に結びついている。メディア産業に生きるジブリーやサラディンの活動が、何よりも、番組の制作や宣伝のための資金投資に依拠しているからだ。なかでも、イギリスのメディア王とされるハル・ヴァランスは、複数の登場人物をつなぐ横糸の役割を果たしている。サラディンは、*Aliens Show* というテレビの人気番組の声優として才能を発揮するが、この番組の制作者・オーナーもこの人物である。彼はサッチャー首相（作品では「トーチャー」つまり「拷問」首相）とも親しいことが自慢で、サラディンに、*Aliens Show* を日本、アメリカ、アルゼンチンなど世界中に売りさばくのは、イギリスへの愛国心からだと言明する。

‘... I,’ Hal Valance announced, ‘love this fucking country. That’s why I’m going to sell it to the goddam world, Japan, America, fucking Argentina. ...’ (Rushdie 277)

最後のアルゼンチンに付けられた形容詞は 1982 年のフォークランド戦争の影響かもしれない。それはともかく、ナショナリズムと結びついたヴァランスのグローバリズムも、最後は彼の広告会社がアメリカの大企業に飲み込まれることにより、アメリカに敗れるという展開になっている。ただしこのパターンも、ある意味では少し古びたといえるかもしれない。国家戦略とグローバリゼーションとの結託は現在でもみられるが、近年のグローバリゼーション研究では、情報通信技術 (Information Communication Technology) と結びついた金融資本の圧倒的かつ無秩序な流れが、20 世紀末ごろからアメリカのような超大国のコントロールも不能にし、世界規模の金融危機を引き起こす状況がより大きな問題になっているからだ。たとえば、1997 年のアジア通貨危機、2008 年のリーマンショック、それが引き金となったグローバルな不況、アイスランド危機などである。

次に、『悪魔の詩』における「テクノロジーの光景」についていうなら、これも時代的な制約が強く、冒頭の飛行機以外に触れられているのは、警察に導入されたコンピュータ・システム、国際直通電話、ソニーのウォークマンくらいである。一方、最近のグローバリ

² ‘The city’s streets coiled around him, writhing like serpents. London had grown unstable once again, revealing its true, capricious, tormented nature ...’ (Rushdie 330); ‘But the city in its corruption refused to submit to the dominion of cartographers, changing shape at will and without warning, making it impossible for Gibreel to approach his quest in the systematic manner he would have preferred.’ (Rushdie 337-38)

ゼーション研究では、先ほどの情報通信技術が、世界の金融化だけでなく、グローバルな「テロリズム」、「アラブの春」などの民主化運動、さらに反グローバリゼーション（anti-globalization）や「もうひとつのグローバリゼーション」（alter-globalization）の運動などで果たしてきた役割にも光が当てられている。

最後に『悪魔の詩』における「思想／イデオロギーの光景」だが、これは非常に複雑な問題になる。冒頭の歌合戦にも暗示されていたように、民族や文化の純粋性や独立性と、その折衷性やハイブリッド性というテーマは、作品中さまざまに練り上げられていくが、これは近年のポストコロニアル理論などでは、すでにお馴染みのテーマといえるかもしれない。ここで強調したいのは、むしろ、この小説全体のダイナミズムを生み出している、ジブリールの夢あるいは物語の「分裂」という点である。以下は小説の後半、ロンドンをさ迷うジブリールである。

[Gibreel] no longer recognizes the distinction between waking and dreaming states; - he understands now something of what omnipresence must be like, because he is moving through several stories at once, there is Gibreel who mourns his betrayal of Alleluia Cone, and a Gibreel hovering over the death-bed of a Prophet, and a Gibreel watching in secret over the progress of a pilgrimage to the sea..., and a Gibreel who feels, more strongly every day, the will of the adversary who has taken the face of his friend, of Saladin his truest friend ... (Rushdie 472)

ジブリールは自分が目覚めているのか夢を見ているのか、区別がつかなくなっていると最初にあるが、そのあとに並べられている4人のジブリールないし4つの物語にも、現実と夢が混在している。1つ目のアレルヤ・コーンと4つ目のサラディンの物語はロンドンを中心とする、どちらかといえば「現実的」な出来事だが、それらの物語にも、ジブリールの夢や幻覚が影を落としている。彼には、ごく現実的なレベルで「妄想型統合失調症（paranoid schizophrenia）」という医者診断も下されている。2つ目の物語は、作品中マハウンドと呼ばれている預言者ムハンマドの物語、3つ目は、現代インドの村人が、アイシャというカリスマ的な少女に率いられてメッカに向かう巡礼の物語である。このうち、2つ目の預言者の物語が冒瀆的とされ、ホメイニ師によるファトワーが下されたが、逆に3つ目の巡礼の物語の結末を、サラ・スレーリは「透明で自由な信仰の、驚くべき瞬間」と評している（Suleri 205）。

ただしジブリールは、これらの夢を好き好んで見ているわけではない。小説中の実在の人物であるローザ・ダイヤモンドの夢に巻き込まれたときにも、彼はローザの意思の「囚人になり、操られている（held prisoner and manipulated）」とある。彼はとりわけ、預言者の夢にひどく苦しめられ、眠りにつかないようにと必死に頑張る。つまりジブリールは、他者の意思や欲望に巻き込まれ、それに揺り動かされる、本質的に他者依存型の存在なのだ。この「受苦」の状況は、現代のグローバリゼーションの問題を考える上でも非常に重要な

ポイントに思われる。

ジブリールの夢のこのような分裂は、抽象化するなら、この世界をどう捉えるかという点にかかわる分裂といえるだろう。この点に関連して、『悪魔の詩』には何人か、ラシュディの分身といえる詩人や言葉の操り手たちが登場する。ロンドンのジャンピー・ジョシ、ムンバイのブーベン・ガンディ、預言者の物語のなかの風刺詩人パール、預言者の書記を務めるサルマンなどである。彼らはみな、ときには危険に身をさらしつつ、自分の生きている世界を言葉でとらえようと試みる。パールとサルマンはとくに、詩を書いたり、言葉を操ったりすることで、一步間違えば命を落としかねないことを自覚している。実際パールは、確信犯的に最後の作品を公表した後、処刑される。ラシュディ自身が確信犯だったのではないかと、ふと思わせる場面である。

ジブリールは最後、サラディンの前でピストル自殺を遂げるが、サラディンは、ムンバイの社会の現実のなかで生きていくことを決意する暗示で終わっている。ヒンドゥーとムスリムの宗教対立に抗議する数千人規模の「人間の鎖」に加わり、思わず感動したりもしている。このあたりはやや説得力が弱い気もするが、グローバリゼーションの問題に話を戻すなら、『悪魔の詩』以後、経済や「テロリズム」のグローバリゼーションと並行して、反グローバリゼーションないし「もうひとつのグローバリゼーション」を主張する、それ自体グローバルな運動も力をつけてきた。たとえば、1994年に起こった、メキシコのマヤ系民族のサパティスタ運動、1999年のWTOの会議をめぐる起こったシアトルの戦い、2001年にブラジルのポルトアレグレで開始された世界社会フォーラムなどだ。詳しく紹介する紙面はないが、重要なのは、これらが単発的・偶発的なものではなく、グローバルに連鎖して起こった運動だという点である。また、前にも触れたように、各種のソーシャル・ネットワーク・サービスが、これらの運動で重要な役割を果たしてきたことも調査されている。

4. グローバリゼーションと私たち

グローバリゼーションには、ジブリールの夢のように、あるいはアパデュライのモデルにあるように、数多くの分裂的な局面が含まれている。それをひとつの全体として想像するのは至難の業だが、スティーガーは最近、「グローバル想像界 (global imaginary)」という概念を提唱している (Steger 2015, 41)。スティーガー自身は、その実際の働きについてあまり深く掘り下げてはいないが、グローバリゼーションに関する私たちの主観や想像を強調しようとする点で、有意義な提案といえる。

一時期、グローバリゼーションはあるのかないのか、あるべきか、あらざるべきかといった議論がよくなされたが、いまは多分、そのような話で済まされる状況ではないだろう。たとえば、いま紹介したスティーガー編の本には、グローバル化されたフランチャイズ店の2011年の売上高世界ランキングが紹介されている。1位がマクドナルド、2位がセブンイレブン、3位がケンタッキーフライドチキン、4位がサブウェイである。5位にバーガーキ

ング、7位にサークルK、8位にピザハットがランクインしている。これらのチェーン店に一切かわりがないという「日本人」は、現在どのくらいいるだろうか？

話は少し変わるが、サスキア・サッセンの *The Global City: New York, London, Tokyo* (2001) によれば、「グローバル都市」のひとつの特徴は、それが特定の国のなかにありながら、さまざまな面で、国外との結びつきがより重要になっているという点にある。だからといって、これらの都市が豊かだというわけではなく、まさしくこのような結びつきにより、世界の貧困問題や格差問題もグローバル都市に凝縮されるとサッセンは指摘している。

一方、スピヴァクは、サバルタンたちが定住する「田舎」にウェイトを置き、以下のよう

The definition of the subaltern is now being rewritten. It is the group that, although or perhaps because, cut off from ordinary lines of mobility, is being touched directly by global telecommunication ... (Spivak 2012, 216)

グローバリゼーション時代のサバルタンは、通常の移動のラインから切り離されているにもかかわらず、あるいはまさしくそのために、グローバルな遠隔通信に直接さらされているという指摘である。そして、グローバルの最前線はいまや都会ではなく田舎にあり、このことを学ぶことが、上からではなく下からの回路で、ポストコロニアル性からグローバリズムに向かう道なのだと論じる。

Today's global front is in what can be called the country, not the city at all. To learn that is to move from postcoloniality to globalism, from below....Today's global front is in what can be called the country, not the city at all. To learn that is to move from postcoloniality to globalism, from below. (Spivak 2012, 212)

同じ本でスピヴァクが力説している「美的教育 (aesthetic education)」も、重要な意味で、このようなスタンスと結びついているにちがいない。

I believe in an aesthetic education for everyone. All that I have said in the Introduction to this book can be summarized as follows: by aesthetic education I mean training the imagination for epistemological performance. (Spivak 2012, 122)

それは認識の遂行のために想像力をトレーニングすることなのだと彼女はいう。彼女はまた、「危機に追われるグローバル化 (crisis-driven globalization)」と「戦略に動かされるグローバル化 (strategy-driven globalization)」とを区別している。これらの主張を筆者なりにまとめ直すなら、危機に追い立てられ、経済や政治の「計算」で対応するグローバリゼーシ

ョンを辛抱強く修正・是正・代補し、人間化していくことが可能だとするなら、いまの時代・いまの世界に応じた想像力のトレーニングを積み重ねることにより、私たちとグローバルゼーションとの関係を粘り強く構想していくこと、それ以外に方法はない、あるいはそのような遠回りの努力が、究極的には最善の道になるだろうという主張のように思われる。

繰り返すなら、グローバルゼーションは、ジブリールの夢のように、あるいはアパデュライのモデルにあるように、多面的で分裂的である。それをひとつの全体として想像するのは至難の業である。しかし、そのような状況のなかでも、私たちの日常において、‘What kind of idea are we in the age of globalization?’という問いをあえて発したり、その答えを考えあぐねたりすることが、今後ますます重要な営みになることは間違いだろう。

参考文献

- Appadurai, Adjun. ‘Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy.’ *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1996.
- . *Fear of Small Numbers: An Essay on the Geography of Anger*. Durham and London: Duke University Press, 2006.
- Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. London: Routledge, 1994.
- Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*. Cambridge: Polity Press, 1990.
- Hall, Stuart. ‘The Local and the Global: Globalization and Ethnicity.’ *Culture, Globalization and the World-System*. Ed. Anthony D. King. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1997.
- Hardt, Michael and Antonio Negri, *Empire*. Cambridge: Harvard University Press, 2000.
- Hirst, Paul and Grahame Thompson, ‘Globalization – A Necessary Myth?’ *The Global Transformations Reader*. Eds. David Held and Anthony McGrew eds. Cambridge: Polity Press, 2000.
- Robins, Kevin. ‘Encountering Globalization.’ *The Global Transformations Reader*. Eds. David Held and Anthony McGrew eds. Cambridge: Polity Press, 2000.
- Rushdie, Salman. *The Satanic Verses*. New York: Picador, 1997.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *An Aesthetic Education in the Era of Globalization*. Cambridge: Harvard University Press, 2012.
- Steger, Manfred B. *Globalization: A Very Short Introduction*. Oxford; Oxford University Press, 2013.
- . *The Global Studies Reader* (Second Edition). New York and Oxford: Oxford University Press, 2015.
- Suleri, Sara. *The Rhetoric of British India*. Chicago: University of Chicago Press, 1992.